

カネミ油症は終わっていない

闘う母らの証言 記録映画に

あすから長崎で上映

国内最大規模の食品公害について伝える記録映画「母と子の絆 カネミ油症の真実」が29日、12月5日、長崎市万屋町の長崎セントラル劇場で上映される。救済が不十分だと訴え、子や孫への影響を心配し続ける親たち。そんな姿を前にした監督が、今も苦しむ人や研究者らの証言を一つひとつ集めた。

1968年、カネミ倉庫（北九州市）製の食用の米ぬか油にダイオキシン類が混入する「カネミ油症」が発覚した。皮膚や内臓の疾患、全身の倦怠感などの被害の訴えは、長崎県や福岡県など西日本一帯で約1万4千人に上った。

だが、今年3月末時点の認定患者は累計2377人。患者と認定され、カネミ倉庫から見舞金などを受け取るには、血液中の汚染物質の濃度が一定基準を超えなければならぬ。症状を自覚していても認定されない人たちが救済を求めている。

映画制作・監督した稲塚秀孝さん（74）は、広島と長崎で二重被爆した人や東京電力福島第一原発事故に遭った人たちを主人公に映画を作った。



◀カネミ油症の被害者の背中を撮った写真＝河野裕昭さん撮影

映画「母と子の絆 カネミ油症の真実」で監督を務めた稲塚秀孝さん

◀映画「母と子の絆 カネミ油症の真実」で、自身と子どもに表れた症状を語る岩村定子さん（リタキオンジャパン提供）



岩村さんの長男・満広さんは唇が裂け、肛門が閉じたまま生まれ、4カ月で亡くなった。岩村さんは映画の中で、油症の解明や治療を担う九州大学の研究班にへその緒を分析してもらったり、長崎県に認定を申請したりと、長男に起きたことを明らかにしたいと奔走する。

稲塚さんは「差別や偏見を恐れ、名乗り出ない人、関わりたくない人がまだまだいる。それをいいことに、国や企業が被害を過小評価し、被害を訴える人たちの間に分断を生んでいるのではないかと話す。『終わった問題ではないし、これからも起こりうる問題。何ができるか、見た人に考えてみてほしい』と願う。

長崎セントラル劇場での上映は29日、12月5日、午前10時20分と午後5時半の2回。29、30日は上映後に稲塚監督の舞台あいさつがある。一般2千円、大学生1500円、小・中・高校生1千円、60歳以上1300円。（花房真子）